# 【研究事業名】地域多職種協働実習に関する研究事業

研究代表者：茨城県立医療大学　保健医療学部　看護学科　斉藤瑛梨
共同研究者：茨城県立医療大学　保健医療学部　看護学科　山口 忍
作業療法学科　堀田 和司
理学療法学科　篠崎 真枝
放射線技術科学科　安江　憲治

## 1　事業（事務）の目的及びその概要

本研究事業では、地域多職種協働実習を受講した学生を対象に多職種協働やチーム医療に対する学生の学習準備性・意識変容についてReadiness of health care students for inter professional learning(RIPLS)評価尺度を用いて調査を行った。調査は、授業内容の改善に活用することを目的に、実習前後で実施し受講学生の学習効果を把握した。また、実習内容や研究成果について一般社団法人地域医療教育研究所のホームページに掲載することで本事業を周知し、学会発表や論文発表することで地域多職種協働実践の活性化につなげる。

## 2　地域多職種協働実習の内容

地域多職種協働実習を以下日程で実施した。

【実習前準備】
・グループワーク(実習中に体験したいこと・知りたいこと等の共有、実習地域概要の確認)
・各医療専門職の仕事内容に関する講義（座談会）

【夕張実習】
日程：令和 6 年 8 月 27 日-8 月 30 日（4 日間）
実習場所：夕張市立診療所、夕張市役所、夕張市老人福祉会館、日本キリスト教会夕張伝道所、夕張市石炭博物館、幸せの黄色いハンカチ想い出ひろば
実習概要：介護予防事業への参加、保健師からの講話、夕張市立診療所見学と地域医療に携わるスタッフとの懇談会、福祉総合ケース会議への参加、夕張の医療を考える集いへの参加、夕張市の歴史や炭鉱での暮らしを学ぶ施設見学、実習報告会
参加学生数：6 名

総合福祉ケース会議

スタッフとの懇談会

夕張の医療を考える集い

【茨城実習】

日程：令和 6 年 9 月 7 日、10 月 5 日、11 月 2 日、11 月 23 日、12 月 28 日
（各自、上記スケジュールから 3 日間参加）

実習場所：医療法人博仁会関連施設(フロイデ水戸メディカルプラザ、志村大宮病院周辺施設)、
茨城県常陸大宮市北富田地区

実習概要：朝市への参加、医療スタッフとの懇談会、志村大宮病院周辺施設の見学、茨城県常陸大宮市北富田地区のもちつき大会参加および独居訪問

参加学生数：33 名

施設見学

医療スタッフとの懇談会

北富田地区のもちつき大会参加および独居訪問

3　質問紙調査の実施

地域多職種協働実習の授業改善を目的として、多職種協働やチーム医療に対する学生の学習準備性や意識変容の評価尺度で国際的に利用されているReadiness of health care students for interprofessional learning(RIPLS)に基づいた質問紙調査を実習前後で実施し、受講学生の学習効果を評価する。現在分析中であり、今後、学会発表を予定している。

4　助成事業の成果について

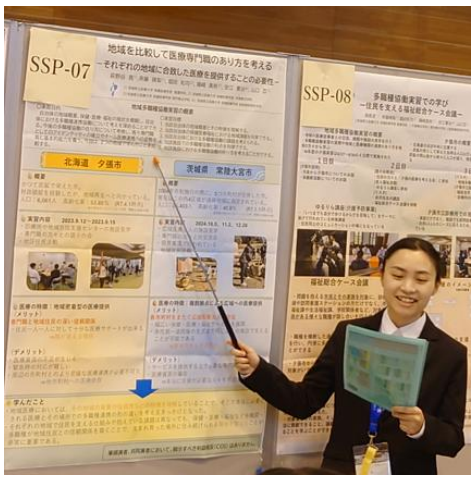
【学会発表】

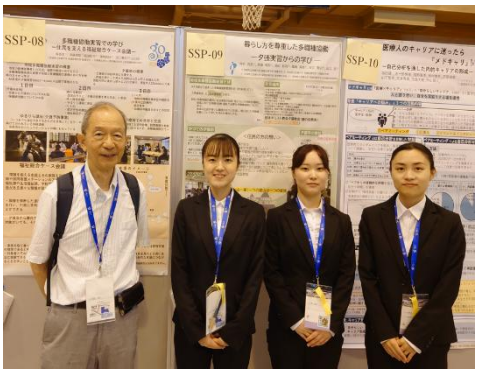
第 16 回日本プライマリ・ケア連合学会学術大会（札幌）にて、本事業の成果として以下 3 演題（活動報告）の発表を実施した。

①演題名：　地域を比較して医療専門職の在り方を考える
　　－それぞれの地域に合致した医療を提供することの必要性－
演　者：　茨城県立医療大学保健医療学部看護学科 3 年　萩野谷　茜
資料 1　（演題抄録資料）

②演題名：　住民を支える福祉総合ケース会議での多職種協働　－夕張実習からの学び－
演　者：　茨城県立医療大学保健医療学部看護学科 3 年　森　香澄
資料 2　（演題抄録資料）

③演題名：暮らし方を尊重した多職種協働　－夕張実習からの学び－
演　者：茨城県立医療大学保健医療学部看護学科3年　坪井　莉菜
資料 3　（演題抄録資料）






第 16 回日本プライマリ・ケア連合学会学術大会発表および参加風景

【学内報告会】

日時：令和 7 年 2 月 5 日

地域多職種協働実習の取り組みについて、学内で報告会を行った。報告会で実習グループごとに学びを共有した。報告会は学内教職員の SD・FD 研修会としても位置付けられた。

①地域多職種協働実習に参加して気づいたこと（以下、学生が作成したスライドより抜粋）

・多職種協働することで患者にとって最適な提案・治療ができることが分かった

・対象者本人の思いが地域包括ケアの中心であり、地域の多職種はネットワークを補う役割がある

・対象者の生き方を尊重した地域医療の提供が重要

・地域住民との会話から対象者の背景を見る力が求められている

②専門職協働で大切だと考えたこと（以下、学生が作成したスライドより抜粋）

・定期的にミーティングを開催し、地域住民の健康問題を専門職間で共有し、どういった医療を提供していけば良いのか話し合うこと

・地域の行政やボランティア組織など医療以外の分野とも協力・連携を行うこと

・緊急時でも迅速に対応するために、他職種の専門性や役割を理解し、知識やスキルを補い合うこと

・地域の特徴や文化への興味を常に持ち、理解しようとすること

・自分自身の知識を広げ、様々な視点で物事をみる努力を怠らないこと

報告会の様子

資料１

# 地域を比較して医療専門職の在り方を考える
## ―それぞれの地域に合致した医療を提供することの必要性―

萩野谷茜[1)]、斉藤瑛梨[2)]、篠崎真枝[2)]、堀田和司[2)]、安江憲治[2)]、山口忍[2)]

１）茨城県立医療大学　保健医療学部看護学科
２）茨城県立医療大学

【背景と目的】

茨城県立医療大学では、地域での活動を通じて必要な多職種連携について学ぶ「地域多職種協働実習」が行われている。今回、私は北海道夕張市と茨城県常陸大宮市の２か所の実習を経験し、多くの学びを得る機会となった。

【活動内容】

夕張市はかつて炭鉱で栄えた市であり、現在は高齢化率 54%、4000 世帯を割り込む道内でも人口減少が大きい過疎地域の一つである。常陸大宮市は５つの町村が合併した市であり、高齢化率は 40%、現在中心部以外の 4 区域全てが 3000 世帯を割り込み過疎地域に指定されている。

夕張市での医療の特徴は、地域密着型の医療が提供されていることである。実習では診療所や地域包括支援センターの施設見学、専門職の方々との語りの会、地区住民活動に参加した。診療所や人口が少ないからこそ築くことができる専門職との深い信頼関係と多職種の顔が見える関係により、地域住民一人一人に対して十分な医療サポートを行うことができることを学んだ。常陸大宮市での医療の特徴は、代表的な法人が広域に医療を提供していることである。実習では常陸大宮市を中心に医療福祉を展開している志村フロイデグループの施設見学や専門職との交流、限界集落で行われている地域住民活動へ参加した。診療所、訪問サービス、介護施設、就労支援、児童発達支援など幅広い保健・医療・福祉サービスを周辺の市と連携して提供することで、急性期から退院後の生活まで支えることが可能であることを学んだ。

【考察】

２か所の実習を通し、地域医療においては、その場所の人口動態や住民性などの特徴を理解していることで、そこで本当に必要とされる医療とその場所での多職種連携の形の違いを考えるきっかけとなった。両市の実習に参加することで、地域住民を支える仕組みや形は異なっても、地域住民との信頼関係や生まれ育った場所に住み続けられる環境を整えることを考えることが非常に重要であることを学ぶことに繋がる有意義な実習であった。

資料２

# 住民を支える福祉総合ケース会議での多職種協働
## ―夕張実習からの学び―

森香澄[1)]、斉藤瑛梨[2)]、篠崎真枝[2)]、堀田和司[2)]、安江憲治[2)]、山口忍[2)]

１）茨城県立医療大学　保健医療学部看護学科
２）茨城県立医療大学

【背景と目的】

茨城県立医療大学では、地域の医療・福祉・保健で求められる多職種連携について学ぶ、地域多職種協働実習を行っている。実習では、診療所見学の他に、住民の方々との懇談会や介護予防講座、多職種から構成されたケース会議に参加し、夕張の方々の想いを知るとともに、多くの学びを得ることができたことを報告する。

【活動内容】

夕張市は炭鉱で栄え、働いていた多くの人は山間部の炭鉱住宅に住んでいる。住民の方々からは「炭鉱時代の支え合いの文化が今でも残っていて、地域の方々は皆親切だ」という声が多く聞かれ、高齢になっても夕張市に住み続けることを選ぶ、地域愛の深さが印象的であった。

多くの活動の中でも、特に福祉総合ケース会議では多職種協働に関する理解を深めることができた。医師や訪問看護の方だけでなく、市の保健福祉課、生活福祉課、学校関係者など、対象家族と関係がある様々な職種が話し合い、家族を支えるための意見交換を行う様子は新鮮であった。対象事例が夕張市から離れて暮らすことになった家族との関わりついて、対象事例が市外に移り住んだとしても、残った家族への支援の必要性は変わらない。対象事例が市民でなくなったから終わりではなく、市内に残った家族への支援を異なった角度から行っている会議は印象的で、支援が必要な人が変わっても途切れることなく支援の方法を考えることは、家族支援の理想であると感じた。支援者は地域で暮らす人々の中に入っていくイメージで、その人の暮らしやこれからしたい暮らし方に合わせた支援が必要になってくるという新たな視点を得ることができた。

【まとめ】

私は、今後家族を対象にした看護を学んでいく。夕張での実習は、対象者とその家族、そして暮らしを中心に支援を展開すること、多職種で連携することで家族員全員のより良い生活に貢献できること、課題を職種間で共有することで多角的な支援につながることを学ぶことができた貴重な時間であった。

資料３

# 暮らし方を尊重した多職種協働
## －夕張実習からの学び－

坪井莉菜[1)]、斉藤瑛梨[2)]、篠崎真枝[2)]、堀田和司[2)]、安江憲治[2)]、山口忍[2)]

１）茨城県立医療大学　保健医療学部看護学科
２）茨城県立医療大学

【背景と目的】

茨城県立医療大学では、対象地域の概況と生活環境や伝統・風土などの特徴を理解し、地域における保健・医療・福祉で必要な多職種連携について学ぶ「地域多職種協働実習」が行われている。今回、夕張市で行われた実習に参加し、地域の住民や様々な職種の方々と交流し、場に応じた多職種協働について学びを深める機会となったことを報告する。

【活動内容】

実習では、診療所や福祉総合ケース会議の見学、介護予防事業の体験や、地域で働く多専門職の方々との交流会などに参加した。

介護予防事業の体験では、多専門職が一つの事業の中で其々の分野を活かして活動することが、高齢者の健康意識の向上に貢献することを学んだ。

実習の中で特に印象的だったのは、住民の方々との懇談会である。夕張は炭鉱で栄えた地域で、一つの鉱山は一つの家族のような絆があることを意味する「一山一家」という言葉と精神が現在まで受け継がれている。住民の方々からは、互いに周囲の人を気遣いながら助け合って生活した経験や、そこに住む人の地域に対する想いについてお聞きした。自身が大切にする環境の中で暮らすことの満足感、周囲との関わりが生み出す活力を実感し、互助やそれを支援する多職種の役割を考える大きな契機となった。

【まとめ】

夕張市は人口減少と高齢化が急速に進んでおり、将来の日本の姿とも言われている。これらの課題への解決策は国内でも何度も議論されており、今後も必要だろう。今回の実習での学びから、今そこにいる住民の暮らし方や地域ならではの人の輪を議論の視点とすることの重要性に気付くことができた。一人ひとりの暮らし方を尊重する多職種協働では、専門職からの一方的な活動ではなく、住民が主体となって生き生きと暮らせるように自助・互助を促進し、補助する活動が求められると感じた。暮らしには様々な場面があり、各々の場面での多職種連携が住み良い地域づくりに繋がることを認識した価値のある実習であった。